

# オスカー・グローエ作曲 〈7月の夜〉を巡って

— フーゴー・ヴォルフの芸術理念と創作 —

梅 林 郁 子\*

(2013年10月22日 受理)

A study of Oskar Grohe's *Juli-Nacht* :  
Artistic idea and composition of Hugo Wolf

UMEBAYASHI Ikuko

## 要約

判事であり、また音楽家たちの後援者でもあったオスカー・グローエ（1859-1924）は、1890年に作曲家フーゴー・ヴォルフ（1860-1903）と知り合い、その後も良き友人同士であり続けた。グローエはアマチュアの作曲家でもあり、ヴォルフと知り合った当時、自作のリート〈7月の夜〉をヴォルフへの献呈作品としている。1890年9月25日付の、ヴォルフからグローエに宛てた書簡には、これらのリートに対するヴォルフの評価とともに、彼の芸術に対する理念が書かれている。それは、芸術に真実や誠実といった自然なものを求めるのではなく、永遠のため、デモニッシュなものに身を捧げる作曲家の姿を示すものであった。同日に、《イタリア歌曲集》第I集の最初の曲〈遠くへ旅立つと聞いたけれど〉が作曲され、ここには歌唱旋律における同音反復やピアノ・パートにおけるモチーフの反復が見られ、これは《イタリア歌曲集》第I集全体を通じての特徴的な作曲技法となっている。そのため、このような技法がヴォルフの作曲に対する理念の、具体的な音楽的表現方法の一端と考えられる。

**キーワード：**フーゴー・ヴォルフ、オスカー・グローエ、〈7月の夜〉、《イタリア歌曲集》

### 1. はじめに

オスカー・グローエ Oskar Grohe（1859年マンハイム生 -1924年ハイデルベルク没）は、マンハイム大侯爵領の裁判所判事であり、後にフィリップスブルクで上級裁判所判事の職に就いたが、目を患ったことから早期退職をし、残りの人生を音楽や演劇の後ろ盾となって活動した人物である。彼は、リヒャルト・ヴァーグナー Richard Wagner（1813-1883）から強い影

\* 鹿児島大学教育学部 准教授

響を受け、アマチュアではあるが作曲にも従事した他、フーゴー・ヴォルフ Hugo Wolf (1860年ヴィンディッシュグラーツ生-1903年ウィーン没)をはじめ、リヒャルト・シュトラウス Richard Strauss (1864-1949) やヴィルヘルム・フルトヴェングラー Wilhelm Furtwängler (1886-1954) らの音楽活動を支援した (HILMAR 2007: p.154) ことでも知られている。特にヴォルフとは、支援者としてだけでなく、晩年に到るまで友人としても親しい付き合いを続けた。

本稿では特に、二人が知り合った当時、グローエがヴォルフに献呈した自作のリート〈7月の夜 *Juli-Nacht*〉(1890年頃作曲) (自筆譜はウィーン市庁舎図書館 Wienbibliothek im Rathaus に Interne ID-Nr. LQH0265896 として所蔵) を対象として、献呈の経緯と楽曲の特徴を明らかにした上で、ヴォルフが下した曲の評価から、彼の芸術に対する理念を論じる。また併せて、当時のリート作曲におけるヴォルフの具体的な音楽的表現の方法についても述べたい。

## 2. グローエとヴォルフの出会い、そして人間関係

1890年1月22日、『ミュンヘン一般新聞 *Münchener Allgemeinen Zeitung*』に、ヴォルフの友人ヨーゼフ・シャルク Joseph Schalk (1857-1900) が執筆した「新しいリート、新しい生命 *Neue Lieder; neues Leben*」と題する記事が掲載された<sup>1</sup>。グローエはこの記事を読んで、ヴォルフの作品に興味を惹かれ、自ら連絡を取ったのである。当時、ヴァーグナーは既に没していたが、グローエは彼の生誕77周年記念コンサートを企画しており、このコンサートにふさわしいヴォルフのオーケストラ作品がないかと問い合わせの手紙を書いた。これに対し、ヴォルフは大変に喜び、〈ねずみ捕りの男 *Der Rattenfänger*〉、〈ミニヨン *Mignon*〉、〈アナクレオンの墓 *Anakreons Grab*〉、〈ガニュメート *Ganymed*〉<sup>2</sup> などのピアノ伴奏リートのオーケストラ編曲をはじめとして、数多くの(と言うよりも、むしろ可能な限りの)自作品を挙げている(1890年4月16日付、グローエ宛書簡<sup>3</sup>)。これが、二人の関係の始まりとなった。やがて9月中旬頃になると、グローエは3曲のリートをヴォルフに送り、特にこのうちの〈7月の夜〉はヴォルフに献呈されることとなったのである。

以降も、グローエとヴォルフは友情を保ち続けた。1893年にグローエの妻ジャンヌ Jeanne が、息子ヘルムート Helmut の出産から産褥熱の悪化で亡くなった後、ヴォルフはグローエに大変気を遣いつつ、共に過ごす時間を持ったようで、このときの様子をグローエは次のように述べている。「ヴォルフはすばらしく、誠実かつ率直な人物で、彼女(ジャンヌ)をととても尊

<sup>1</sup> この記事については多くの先行研究が言及しているが(例えば、HILMAR 2007: p.154 やウィーン市庁舎図書館 Wienbibliothek im Rathaus ウェブサイトなど)、筆者は直接確認できなかった。

<sup>2</sup> いずれも1888年から1889年にかけて作曲した《ゲーテ歌曲集 *Gedichte von Johann Wolfgang von Goethe*》に含まれるリートで、最初にピアノ伴奏で書かれ、後にオーケストラ伴奏に編曲された。〈ねずみ捕りの男〉と〈ミニヨン〉は1888年作曲、1890年編曲。但し、〈ミニヨン〉は、1893年にも異なるオーケストラ伴奏編曲がなされた。〈アナクレオンの墓〉は1888年作曲、1890年編曲であるが、この編曲は失われており、現在残されている編曲は1893年版。〈ガニュメート〉は1889年作曲、1890年編曲であるが、現在では編曲は失われている (SAMS 1994 3: p.65)

<sup>3</sup> SPITZER 2010 1: pp.343-345.

敬し、また理解もしていました。彼は彼女の手紙を宝物のように大事にしています。ヘルムートの写真を見て、彼は『可愛いやつだ』と言いました」(文中の丸括弧内は筆者による挿入)(WERBA 1971: p.220)<sup>4</sup>。

しかしこの友情もいつも順調ではなく、ときには喧嘩もあった。詳細は不明だが、1894年5月には大喧嘩をしたようで<sup>5</sup>、ヴォルフの書簡に拠ると「グローエは、添えられた簡潔な手紙で、僕たち二人が共にあることを、非常に怒って終わりにすることとした」(1894年5月10日付、恋人フリーダ・ツェルニー Frieda Zerny (1864-1917)宛書簡<sup>6</sup>)のである。しかしヴォルフはその後、友情を回復すべく努力を重ねようとした。この状況は、同じくツェルニーに宛てた次の書簡から読み取れる。「僕はきっともう一度、彼に良いことをするつもりだし、君はそれを信頼していい。さしあたって、彼は友情の捧げものとして、僕の一番新しい写真を手に入れることになる。もしこれが役に立たないならば、僕はもっと威力のある大砲で『無作法者』が遂には『温和に』なるまで、長々と砲撃するつもりだ」(1894年5月10日付、ツェルニー宛書簡<sup>7</sup>)。やがて、このヴォルフの「砲撃」は効を奏した。「友人のグローエが今日、非常に心のこもった、節度ある手紙を送ってきてくれた。猫がネズミを相手にしないでいられるように、今回僕たちふたりは、なんとか当て擦りをせずに、まずまずやっている。僕のボタンホールの花(写真を見て欲しい)は、ごたごたを締めくくるには、充分意味があるように見える。僕が「花を通して」言いたかったことを、彼は理解していると思っている。いいね! 全くもってすばらしい! でも、写真に花が写っていたのは、全くの偶然だったのだ。彼の花に関するこじつけで、彼を喜ばせてやろう。その他の点では、彼はとても好ましく、親切で、全く打ち解けた調子で書いてくれた」(1894年5月29日付、ツェルニー宛書簡<sup>8</sup>)。

その後もグローエは、陰に陽にヴォルフを、そして彼の音楽活動を援助し続けた。一例を挙げると、後にヴォルフがオペラ《お代官様 *Der Corregidor*》(1895年作曲)を作曲するにあたっては、作曲に専念できるよう1,500フローリンを用立て<sup>9</sup>、さらには初演に際して「彼の支持のおかげで、マンハイム国立歌劇場の受け入れも実現した(グローエ自身は、当時目立たない場所に隠れていた)し、支配人バッサーマンとの最初の交渉も、彼に導かれたものだった」

<sup>4</sup> このグローエの手紙は、1893年8月14日付、義母宛とされており、Werba 1971のドイツ語の他、WERBAの基となる本と考えられるWALKER 1992: p.327(第1版は1951年出版)には、さらに長い箇所の部分引用が英訳で掲載されている。しかし、どちらの文献にも書簡の所蔵先が記されておらず、筆者は直接書簡を確認することができなかった。そのため、本文の日本語訳はWERBAに拠っている。

<sup>5</sup> この間のグローエからヴォルフに宛てた書簡は残されていないため、喧嘩の原因は不明。

<sup>6</sup> SPITZER 2010 2: p.379.

<sup>7</sup> *ibid*: pp.379-380.

<sup>8</sup> *ibid*: pp.393. ヴォルフが、グローエからこの書簡を得たのは、ヴォルフが先立って、次のような心を込めた書き出しによる、仲直りを求めた書簡を送ったためである。「長い沈黙の後、遂に再び『尊敬すべき和解』の訪れという立場に僕を立てせる、適切な機会を見出している」(1894年5月18日付、グローエ宛書簡)(SPITZER 2010 2: p.385)。

<sup>9</sup> 「僕に合計で1,500フローリンが、1年間の期限で、きちんとした生計を立てるために届けられるならば、僕は気高い友人たちの気前の良さに、本当に助けられることとなるだろう。」(1895年1月18日付、グローエ宛書簡)(SPITZER 2010 2: p.553)というヴォルフの具体的な要請に応え、グローエは他の友人たち、つまり法廷弁護士のフーゴー・ファイスト Hugo Faisst (1862-1914)や銀行家のヘルマン・ヒルデブランド Hermann Hildebrandt (1847-1924)とこの額を分担して支払う(WALKER 1992: p.374)ことで、ヴォルフの生活を援助した。

(HILMAR 2007: p.155) ののである。こうして、グローエとヴォルフの友情関係は、ヴォルフの晩年まで続き、ヴォルフのグローエに宛てた書簡も 1898 年 7 月 26 日付までが残されている<sup>10</sup>。

### 3. 〈7月の夜〉

#### 3.1 〈7月の夜〉献呈

グローエの自作リート〈7月の夜〉が、ヴォルフに郵送されたのは、1890 年 9 月中旬頃のことと考えられる。これは、1890 年 9 月 24 日付の恋人メラニー・ケッヒェルト Melanie Köchert (1858-1906)<sup>11</sup>、友人グスタフ・シューア Gustav Schur (生年月日不詳 -ca.1921) 宛の各書簡そして、翌 25 日付のグローエ宛書簡に、このリートに関する記述が残されていることから推測できる。ヴォルフが「あなたのリート、私はそのうち 3 曲のみを受け取っている(自筆譜を 2 つと印刷されたものがひとつ)」(文中の下線はヴォルフによる)(1890 年 9 月 25 日付、グローエ宛書簡<sup>12</sup>)と書いているところからすると、グローエは〈7月の夜〉以外に後 2 曲を送ったのであろうが、この作品が何かははっきりしない<sup>13</sup>。しかし、〈7月の夜〉は他の 2 曲と異なっており、ヴォルフに「献呈されており、しかも大層な銘が付けられている。それは『ドイツ・リートの巨匠へ』というもの」(1890 年 9 月 24 日付、シューア宛書簡<sup>14</sup>)であった。

正確な献辞は「友情から成る尊敬において、ドイツ・リートの巨匠フーゴー・ヴォルフ氏へ、オスカー・グローエより、謹んで献呈される Dem Meister des deutschen Lieds, Herrn Hugo Wolf, in freundschaftlicher Verehrung bescheindest gewidmet von Oskar Grohe.」である。前項でも述べたように、グローエは、確かにヴォルフの友人であったが、そもそもグローエはヴォルフの作品の公開演奏を実現しようとして連絡を取ったわけであり、その後の支援の状況も考慮すると、一般的には、ヴォルフがグローエに作品を献呈するのが普通であろう。この点についてウィーン市庁舎図書館は、次のように述べている<sup>15</sup>。この「リートは、よくある献呈の皮肉な逆方向を示している。プロの作曲者としてのフーゴー・ヴォルフが彼のパトロンに、自分のペンから生まれた作品を捧げるのではなく、マンハイムの大侯爵領の裁判所判事であり、精神的にも物質的にもヴォルフを支援していたオスカー・グローエが、自ら書いた作曲作品を彼に献呈している」(ウィーン市庁舎図書館ウェブサイト)。

献呈に際してのグローエの考えは推し量るしかないが、この献呈は、ヴォルフに対する友情

<sup>10</sup> ヴォルフは大変に多くの書簡を書く人物であった (SPITZER 2010 に収録されている書簡は全 2217 通) が、病気のために、1898 年の 8 月頃から、書簡の数は著しく少なくなっている。

<sup>11</sup> ツェルニー、ケッヒェルト、ヴォルフの関係については、梅林 2012pp.60-62 を参照されたい。

<sup>12</sup> SPITZER 2010 1: p.406.

<sup>13</sup> 但し、ウィーン市庁舎図書館のデータベースに拠ると、グローエは〈7月の夜〉と同時期の 1890 年頃に、リート〈タバに Abends〉(詩はロベルト・ハース Robert Haass (1847-1905) による) も作曲しているとのことで、これがヴォルフに送られたリートの中の 1 曲であるかもしれない。この自筆譜も、ウィーン市庁舎図書館に所蔵されている (Interne ID-Nr. LQH0265895) はずであったが、図書館より 2013 年 9 月 12 日現在で、現物が行方不明になっているとの回答を得たため、筆者自身はこの楽譜について確認できていない。

<sup>14</sup> SPITZER 2010 1: p.403.

<sup>15</sup> ウィーン市庁舎図書館は、毎月トピックを決めて資料の紹介を行っており、次の記述は、2010 年 4 月に〈7月の夜〉が取り上げられた際の、ウェブサイトでの紹介文からの引用である。

や尊敬を表すと同時に、グローエのもうひとつの面、つまりアマチュアではあるが作曲をする者として、自作品をプロの作曲者に評価して欲しいという気持ちもあったのではないかと考えられる。この点について、ウィーン市庁舎図書館は、グローエがヴォルフと連絡を取り始めた際に「いくつかの彼（グローエ）のミュージズの子どもたちについて、将来的に彼（ヴォルフ）に判断して欲しいと請い求めた」（文中の丸括弧内は筆者による挿入）（ウィーン市庁舎図書館ウェブサイト）と記しているが、この記述が何を根拠に書かれているのかは記されていない。また、楽譜に添えられていたであろうグローエの書簡も残されていない<sup>16</sup>ので、これ以上の考察は推測の域を出ない。

### 3.2 〈7月の夜〉の詩

詩は、ヘルマン・リング Hermann Lingg (1820-1925) の〈7月の夜〉が用いられている。4行3節で構成されており、原文（LINGG 1869: p.135）と訳は以下の通りである。

Julinacht <sup>17</sup>	7月の夜
Schwüle, schwüle Julinacht -- Südwind küsst die Zweige, Was dich so stolz und elend macht, Schweige mein Herz, verschweige!	暑い、蒸し暑い7月の夜 -- 南風が枝にキスをする。 何がおまえをそれほどまでに誇り高く惨めにしているというのか、 語ってはならない、我が心よ、黙っているのだ！
Über den See, der stille ruht, Wehen die Wolkenschatten, Über die stille schlafende Fluth, Über die schimmernden Matten.	湖の上で、風は静かになぎ、 雲の影が動いていく、 静かにまどろむ水の上を、 鈍く輝く草地の上を。
Hörst du's, wie zur Hochzeitnacht Flöte tönt und Geige? Was dich so stolz und elend macht, Schweige mein Herz, verschweige.	まるで、結婚式の夜のためであるかのように、 フルートやヴァイオリンの音色が聴こえるだろう？ 何がおまえをそれほどまでに誇り高く惨めにしているというのか、 語ってはならない、我が心よ、黙っているのだ！

詩の内容は、7月の蒸し暑さといった最初の表現からも、重苦しさや一種の閉塞感が感じられる。また、望まれない結婚の暗喩と、「フルートやヴァイオリン」の祝い事を表す明るい音色の対置は、ロベルト・シューマン Robert Schumann 作曲の歌曲集《詩人の恋 *Dichterliebe*》op.48 の第9曲〈あれはフルートとヴァイオリンだ *Das ist ein Flöten und Geigen*〉のハイブリット

<sup>16</sup> 尚、この時期にグローエからヴォルフに宛てて出された書簡としては、1890年9月22日付の葉書が一通、ウィーン市庁舎図書館に所蔵されている（Interne ID-Nr. LQH0064163）。しかし、この葉書ではヴォルフの合唱曲《降誕祭前夜 *Christnacht*》（1889年完成）などについては言及されているが、自作品については述べられていない（この葉書については、複数のネイティブ・スピーカーに確認を依頼したが、2～4語程度読み取りが不可能な部分があった。しかし全体の文脈から言及はないと判断した）。

<sup>17</sup> グローエは自筆譜に、リートの標題を Juli-Nacht と記しているが、リングの詩集（LINGG 1869: p.135）では Julinacht と表記されている。

<sup>18</sup> このハイネの詩は、詩集『歌の本 *Buch der Lieder*』より、1822年から1823年にかけて書かれた「抒情的間奏曲 *Lyrishes Intermezzo*」から選択されたものである。〈あれはフルートとヴァイオリンだ〉の詩も、フルート、ヴァイオリン、トランペットなどの音が婚礼の宴の象徴として扱われ、「その合間にすすり泣き、呻いている Dazwischen schluchzen und stöhnen/ 愛らしい天使たちが Die lieblichen Engelein」という言葉で、この結婚を望まぬ語り手の気持ちを表している。尚、「愛らしい天使たちが」は、原詩では「良き天使たちが Die guten Engelein」である（WINDFUHR 1975: pp.152-153）。

ヒ・ハイネ Heinrich Heine (1797-1856) の詩<sup>18</sup> が思い起こされる。

### 3.3 〈7月の夜〉の楽曲構造

曲全体の楽譜は、本稿末尾の【譜例1】に示す。この楽譜は自筆譜から起こしているが、便宜上自筆譜には無い小節番号を、各段の左肩に振っている。

曲は cis-Moll、4/4 拍子で、詩節の区分に沿って、A-B-A' の三部形式を取っており、全40小節。全体の構成を、【図1】に示す。

区分	前奏	A	B	間奏	A'	コーダ
小節	1-2	3-10	11-23	24-25	26-36	37-40

【図1】〈7月の夜〉の形式

最初の2小節間の前奏の右手には、Aの歌唱パート旋律を先取りして、旋律の断片が反復される。その後のAでは、特に3-6小節間で、【譜例2】のように歌唱パートとピアノ・パートの右手に全く同じ旋律が、同じ音高で配置されている。このような作曲技法は、古典主義の時代以前においては比較的頻繁に見られるが、19世紀も末に近くなっていた当時としては、いささか古風と言わざるを得ないだろう。



【譜例2】〈7月の夜〉第3-4小節

また、和声の動きとしては<sup>19</sup>、A全体を cis-Moll と捉えると、詩の第1節第1行（第3-4小節）がI、詩の第1節第2行「南風が枝にキスをする」にあたる部分（第5-6小節）のみ長三和音のIII、そして第1節の残り2行の部分（第7-10小節）では、再び短三和音のVが基本と捉えられる。この部分では、概ね詩の内容を短三和音と長三和音の区別で表しており、全体的には和声の変化が少ない部位である。

Bは、詩の第2節に相当し、詩の内容は第1節と第3節に挟まれて、むしろ穏やかであるが、曲においてはAと比較すると、旋律の動きも和声の変化も大きな部位となっている。第1行

<sup>19</sup> 以下、和音記号の表記方法は、島岡1983による。

にあたる部分（第11-12小節）は、E-Durの $V_7$ とIの反復であるが、【譜例3】に示すように、第2行の部分（第13-14小節）ではe-MollのVIからIへ、そして第3行部分（第15-17小節）では、B-Durの $VI \rightarrow I^2 \rightarrow V_7 \rightarrow I$ となっており、この部分のシャープ系からフラット系への転調は、唐突な感じは否めない。さらに、このe-MollとB-Durは、終止形が現れるまでトニックが連続することからも、和声の連結にぎこちなさが感じられる。また、旋律の流れを見ると、第13・14小節では $e^3$ を、第15小節では $g^3$ を中心とした刺繍音的動きが右手に見られ（正確には、15小節の $a^2$ と $a^3$ のオクターブは刺繍音ではないが）、その結果、特に第13小節と第15小節ではかなり濁った響きが生まれる結果となっている<sup>20</sup>。

【譜例3】〈7月の夜〉第13-17小節

次のA'は詩の第3節にあたり、楽曲の構成としては、変奏の幅の大きいAと捉えられる。【譜例4】のA'の最初の2小節（第26-27小節）に見られるように、ここではAと異なり、右手が三連符の細かい音型を反復しているが、これは詩の「フルートやヴァイオリン」の音に対応するものであろう。

【譜例4】〈7月の夜〉第26-27小節

詩の第3行、第4行は、第1節、第3節共に全く同じであるが、グローエは、第3節最終行の「語っ

<sup>20</sup> 特に第15小節の $a^2$ と $a^3$ のオクターブは、13小節と同じ音型を反復したとすれば説明は付くが、響きとしては $b^2$ と $b^3$ のオクターブなどの方が、相応しいのではないかと考えられる。また、第17小節は音の構成からB-DurのIと考えられるが、右手に $dis^3$ が配置されている。これに関してはナチュラルの付け忘れかとも考えたが確定できないため、【譜例1】、【譜例3】とも自筆譜通りに記譜した。

てはならない、我が心よ」の部分のみを平行調の E-Dur に転調する形で曲を閉じている。

### 3.4 〈7月の夜〉に対するヴォルフの評価

ヴォルフが、〈7月の夜〉の献呈自体についてどのように感じたかはわからないが、リートに関する評価は決して高いものではなかった。ヴォルフは、シューア宛の書簡において、「グローエは私に、彼の作品 (!) として数曲のリートを送ってきた。それは、多くの『望み』を、わずかな『能力』が裏切っている」(1890年9月24日、シューア宛書簡<sup>21</sup>) という、「作品」という語の後の感嘆符も含め、かなり残酷な言葉で言い表している。しかし、友人であるグローエ本人には、もちろんここまで直接的、かつ厳しい物言いはせず、次のように、もう少し丁寧な、しかし、若干皮肉めいた言い方も含めて返事をしたのである。「確かに、今日のリート市場に現れている多くのものより良いです。とりわけそのなかには、真実や自然な表現への、誠実な努力が表れています。その意志はもう良いものです。でも実体、着想——ええ、ええ、芸術は残酷で、それは間違いを半分でも認めないのです。あるかないか、できるかできないか、それがまさに問題なのです。友よ、あなたは僕が、自分の人生の時間のなかで、大侯爵領の裁判所判事や裁判所書記官になりたいと切に願ったりすることはないと信じて下さるでしょうか——そして、なぜそう思わないのでしょうか？ 芸術とは、私たちが奉仕していると、最良の生命力を吸う吸血鬼なので、そして、芸術とは、興奮状態のなかで慰めや活気を与えるものなので、後で正気に返るとこの二日酔いは命取りになるからです。(中略) ああ、あなたは幸運な人だ！ あなたは苦痛を感じることなく、永遠のために何もせずに、善いものや美しいもので満たされた仕事に喜びを見出すことが許されている。ああ、僕が裁判所判事だったなら！」(1890年9月25日付、グローエ宛書簡<sup>22</sup>)。

ヴォルフはこの書簡で、グローエを気遣い、彼の素朴なリート作りを、友人としての立場から懸命に褒めている。しかし、それに続く言葉は、芸術に生きるヴォルフの作曲に対する強い思いを物語っている。ヴォルフは、一見、グローエの現実的な仕事ぶりを羨んでいるかのような書き様でこの話題を閉じているが、実際のところ、彼はリートのなかに真実や誠実さといった自然で健全なものを求めているのではない。つまり、ヴォルフの芸術に対するイメージは、吸血鬼に憑りつかれたような、つまりデモーニッシュ dämonisch で、超自然的なものなのではないだろうか。そして永遠のために、芸術に酩酊した状態で作品を創り上げようと奮闘を続けるヴォルフにとって、判事を務めながら、日曜作曲家的な仕事に手を染める(少なくともヴォルフにはそのように見える)グローエの作曲に対する姿勢と作品が、好評価の対象とならなかったのは、当然のことと言えよう。ここには、ヴォルフの芸術に対する強い理念が示されているのである。

<sup>21</sup> SPITZER 2010 1: p.403.

<sup>22</sup> ibid: pp.406-407.



#### 4. 当時のヴォルフの作曲状況

ちょうどグローエにこの書簡を送った1890年9月25日、ヴォルフは新たな作品に着手した。それは《イタリア歌曲集 *Italienisches Liederbuch*》第I集 I. Bandである。この日、ヴォルフは歌曲集の最初の作品となる〈遠くへ旅立つと聞いたけれど *Mir ward gesagt, du reisest in die Ferne*〉を作曲し、これを皮切りに同年11月14日までに7曲を、そして翌年には15曲を作曲し、全22曲を仕上げることとなった。グローエの作品と比較するものではないが、当時のヴォルフの具体的な作風を参考として示すため、9月25日に作曲されたこのリートについて、以下に簡潔に述べたい。

《イタリア歌曲集》の詩は全て、パウル・フォン・ハイゼ Paul von Heyse (1830–1914) が古いイタリア語の詩をドイツ語に翻訳し、編集・出版した《イタリアの歌の本 *Italienisches Liederbuch*》(1860年出版) から取られている。〈遠くへ旅立つと聞いたけれど〉も同様に、愛する人が遠くへ旅立つと人づてに聞き、涙ながらに、私のことを忘れないで欲しいと訴える内容である。

楽曲の例として、【譜例5】に第1-4小節を示す。

The image shows a musical score for the song "Mir ward gesagt, du reisest in die Ferne". It consists of two systems of music. The first system shows the vocal line and the piano accompaniment for the first four measures. The piano part has a dynamic marking of *pp* and includes the instruction "(zart und ausdrucksvoll)". The second system shows the vocal line and piano accompaniment for the next four measures, with dynamic markings of *p* and *f*.

【譜例5】〈遠くへ旅立つと聞いたけれど〉第1-4小節

ここでの歌唱旋律は、同音を反復しながら2度で少しずつ上昇し、一方ピアノ・パートは2小節から成る左手の半音階による下降モチーフと右手の和音伴奏が、開始位置を変えて反復されていく。このように歌唱パートでは同音、ピアノ・パートではモチーフが反復される

<sup>23</sup> この作曲技法における詳細は、梅林 2013 を参照されたい。

なかで和声を変化させていき曲全体を構成する方法が、《イタリア歌曲集》第I集を通じての、ヴォルフの作曲技法の典型と言えるものだった<sup>23</sup>。このような作曲技法は当時の旋律面、和声面において斬新なものであったろうし、結果、言葉においても独自の表現方法が確立することとなったのである。

グローエのリートも、ヴォルフのリートも本稿で例として取り上げる作品は各1曲であり、先にも述べたように、ここから両者の作品の比較考察を行うものではないが、しかし、ヴォルフの作品における具体的な音楽表現の典型が、グローエのそれと根本的に異なっていることは、指摘できよう。

## 5. まとめ

本稿では、グローエがヴォルフに献呈したリート〈7月の夜〉を対象として、献呈の経緯と楽曲の特徴を明らかにした上で、ヴォルフが下したこの曲に対する評価を考察し、併せてヴォルフの同時期のリート作曲における音楽的表現方法についても述べてきた。

判事という要職につきながら、アマチュアとして作曲を手掛けていたグローエは、1890年よりヴォルフと親交を結ぶこととなった。〈7月の夜〉はヴォルフとの友情を育み始めた1890年9月中旬頃、グローエのヴォルフに対する友情と尊敬の念から、また、リートに対する何らかの判定を得たいとの気持ちがあった可能性もあるが、いずれにしても献呈の形を取って捧げられることとなった。このリートは、部分的に歌詞の内容に対応する音楽的表現が見られるものの、ピアノ・パートと歌唱パートの旋律が同じであるという、当時既に古風となっていたリートの作曲法が踏襲されていたり、また和声や旋律の動きにぎこちなさが見られたりといった点において、プロの作曲者に高い評価を得るには難しい要素が散見される。

そのため、献呈に対する1890年9月25日のヴォルフの書簡での返答は、友人として言葉を選んだ言い方をしてはいるものの、良い評価とは程遠いものだった。さらにこの書簡でヴォルフは、自身の芸術に対する理念、つまり、リートの作曲法に真実や誠実さといった自然なものを求めるのではなく、デモーニッシュな何かに憑りつかれ、興奮状態のなかで永遠の何かを求めざるを得ない、その苦しみのなかに作曲があるという考えが表明されている。書簡と同日に作曲された《イタリア歌曲集》第I集の〈遠くへ旅立つと聞いたけれど〉では、当然ではあるが、グローエとは全く異なった形で作曲に対するアプローチがなされた。具体的には、歌唱パートでは同音、ピアノ・パートではモチーフが反復されるなかで和声を変化させ、曲全体を構成する方法が取られ、これが歌曲集全体の典型的な作曲技法にもなっている。実際のところ、作曲に対する理念が、現実の作曲作品にどの程度、そしてどのような形で反映するかを、確実に検証することは困難である。しかし、グローエ宛の書簡と同日の作品は、少なくとも彼の作曲理念が、音楽における具体的成果として結実した一端と考えられることを以て、本稿の結びとしたい。

本論文で扱った自筆楽譜、及び自筆稿の読み取りにあたって、鹿児島大学法文学部 與倉アンドレア教授にアドバイスをいただきました。ここに、心より御礼申し上げます。

## 引用・参考文献

- HEYSE, Paul (Hrsg.). 1860. *Italienisches Liederbuch*. Berlin: Wilhelm Hertz.
- HILMAR, Ernst & OBERMAIER Walter (Hrsg.). 1978. *Hugo Wolf Briefe an Frieda Zerny*. Wien: Musikwissenschaftlicher Verlag.
- HILMAR, Ernst. 2007. *Hugo Wolf Enzyklopädie*. Tutzing: Hans Schneider.
- LINGG, Hermann. 1869. *Gedichte von Hermann Lingg*. Bd. 2. (2. Auflage). Stuttgart: Cotta.
- SAMS, Eric. 1994. 「ヴォルフ、フーゴ(・フィリップ・ヤコブ)」『ニューグローブ世界音楽大事典』井形ちづる訳・柴田南雄；遠山一行総監修. 3, pp.48-71. 東京：講談社.
- 島岡譲. 1983. 『音楽の理論と実習 II』. 東京：音楽之友社.
- SPITZER, Leopold (Hrsg.). 2010-2011. *Hugo Wolf Briefe*. 4 Bände. Wien: Musikwissenschaftlicher Verlag.
- 梅林郁子. 2012. 「フーゴ・ヴォルフの書簡 — フリーダ・ツェルニー宛 1894年2月から6月まで」『鹿児島大学教育学部研究紀要 人文・社会科学編』63, pp.59-73.
- WALKER, Frank. 1992 (1st ed. in 1951). *Hugo Wolf. A biography*. Princeton, N.J.: Princeton University.
- WERBA, Eric. 1971. *Hugo Wolf oder der zornige Romantiker*. Wien: Molden Taschenbuch Verlag. ([邦訳]ヴェルバ, エリック. 1979. 『フーゴ・ヴォルフ評伝 怒れるロマン主義者』佐藤牧夫；朝妻玲子共訳. 東京：音楽之友社.)
- WERNER, Heinrich. 1905. *Hugo Wolfs Briefe an Oskar Grohe*. Berlin: G. Fischer.
- WINDFUHR, Manfred (Hrsg.). 1975. *Heinrich Heine Historisch-kritische Gesamtausgabe der Werke*. Band I/1, *Buch der Lieder*. Hamburg: Hoffmann und Campe Verlag.

## 引用・参考ウェブサイト

- 梅林郁子. 2013. 「フーゴ・ヴォルフの《イタリア歌曲集》研究 — 第I集と第II集のピアノ・パートにおける作曲技法の特徴と相違」PTNA (一般社団法人全日本ピアノ指導者協会) 2012年度採用研究レポート.  
[http://www.piano.or.jp/report/04ess/ronbunreport/2013/07/19\\_15883.html](http://www.piano.or.jp/report/04ess/ronbunreport/2013/07/19_15883.html) (2013.7.19 公開)
- Wienbibliothek im Rathaus.  
Objekt des Monats April 2010.  
<http://www.wienbibliothek.at/aktuelles/objekt-des-monats-april10.html> (2013.8.22 アクセス)

【事例1】 〈7月の夜〉

*Larghetto mit tiefer Empfindung*

*Adagio*

*Schwebe, schwebe* Juli - nacht

Schwebe - ge - he, Bin dich so stolz und e - loch macht,

Schwebe - ge weils Herz, U - ber den See, der

*zart*

*ppp*

st) - le ruh, Ma - lun die Wei - len - schat - ten - ton,

U - ber die St) - la schla - fer - de Fluth,

U - ber die schla - m - m - den

The image displays a musical score for the piece "7月の夜" (Night of July) by Oscar Groop. The score is presented in two columns, with the left column containing measures 21-25 and the right column containing measures 26-30. The music is written for voice and piano.

**Measures 21-25 (Left Column):**

- Measure 21: Mel. - tin. (Melody line with trills). *ppp* (pianissimo).
- Measure 22: *ppp* (pianissimo).
- Measure 23: *ppp* (pianissimo).
- Measure 24: *ppp* (pianissimo).
- Measure 25: *ppp* (pianissimo).

**Measures 26-30 (Right Column):**

- Measure 26: *ppp* (pianissimo).
- Measure 27: *ppp* (pianissimo).
- Measure 28: *ppp* (pianissimo).
- Measure 29: *ppp* (pianissimo).
- Measure 30: *ppp* (pianissimo).

**Vocal Lines:**

- Measures 21-25: *Schwei-ge, mein Herz, ver-schwei-*
- Measures 26-30: *-ge, mein Herz!*

**Piano Accompaniment:**

- Measures 21-25: *ppp* (pianissimo).
- Measures 26-30: *ppp* (pianissimo).

**Lyrics:**

Mein Herz, wie die Hoch-zeit-macht  
Flie-ge dich, und  
Mein Herz, wie die Hoch-zeit-macht  
Flie-ge dich, und  
Mein Herz, wie die Hoch-zeit-macht  
Flie-ge dich, und